

髭の向く儘

深沢幸弘

一日目

雨が降って居る。

吾輩が目を覚ました時、軒先の茶碗からは既に雨水が溢れ出して居た。
夜明け頃から降って居たに違いない。

暫し雨音を聞き乍ら、滲んだ薄曇りの世界に眼を向ける。

遙か遠くを二足歩行の生き物が行き交って居る。
雨音に歌う事もなく、水溜りに踊る事もない。
ただ忙しなく行き交う許りの彼等に、吾輩は静かに眼を細めた。
此の儘もう一眠りも悪くない。
聊か主張し始めた空腹感は、夢の国の門番に預かって貰おう。
茶碗に溜まった雨水に一瞥を与え、吾輩は小さく蹲った。

徐々に歌声を高くする雨音。
然し、其れが何やら心地良い。

髭に付いた雫の重さも気に成らなくなった頃、一足先に寝惚けた尻尾がピクッと僅かに跳ね、茶碗の水を蹴り零した。
雨は既に大雨である。
直に嵐に成るだろう。

二日目

昨夜は森で眠った。

一体何れ程の時を立ち続けたのか、森の主とも呼べる巨木の洞で朝を迎える。
吾輩は学者ではないので、此の木の名前は知らない。

猛々しい日差しは木の葉に遮られ、涼やかな静寂が木々の吸い上げる水の音さえ響かせている。

幹の中を走る水流が枝先の葉まで届こうという時、果たして蝉が鳴き始めた。
クルリと視線を廻らせると、三本程離れた木の幹に確かに居る。
吾輩の中に微かな興奮が生まれる。

昨日はクワガタを捕った。
其の前はカマキリだったか。
数日前にはカブトの大物も捕まえている。

忍び足で木の根元へ。
後足の跳躍運動と前足の閉塞運動。

ジジッと小さな鳴き声を残し、蝉は吾輩の手に取り押さえられた。
懸命に藻掻く蝉の羽根を啜ってみる。
少し苦い。
夏も終わりという事か。

三日目

路上に濛々と立ち上る煙。

二足歩行の奇妙な生き物達が、何やら大勢並んでいる。

目当てはやはり、あの立ち上る煙なのだろう。

彼等が群がる煙の正体に興味を持った吾輩は、居並ぶ彼等の足元を優雅な歩調で擦り抜けた。

しかしこの行列は大層長い。

交差する幾本もの道を跨いで通ったが、其れでもなかなか先頭に到達しない。

強い日差しの中、其れでもこの長い列に加わる程に彼等を惹き付ける物が、きっとあの煙の下にはあるのだ。

二本脚の林を歩くのもいい加減飽きた頃、ようやく吾輩も煙の近くに辿り着いた。

鼻腔をくすぐる薫りは、何処かで嗅いだ記憶がある。

この煙、何やら吾輩を刺激する。

煙の足元では、二足歩行の生き物達が大量の其れを焼いていた。

並んだ者達が順番に其れを振る舞われているのを見て、吾輩の腹も鳴る。

何とか相伴に預かりたい。

吾輩はこれでも品格を重んじる。

故に忍び寄り、掠め取る様な野蛮な行動は起こさない。

だが、今一度列の最後尾に加わるのも面倒である。

並ぶは嫌だが食事はしたい。

何とも進退窮まった。

悩むのは一番面倒である。

悩むくらいなら両方辞めてしまえと、煙の見えない通りの裏へと逸れてみた。

すると其処に建つ飯屋の主人と目が合った。

店主は吾輩に目配せすると、厨房に火を入れる。

飯屋に立ち上る煙。

この煙、何やら唾液を誘い出す。

暫し後、店主が吾輩の前に皿を置く。

良い色に焼けた其れが、吾輩から食欲以外を奪い去った。

何とも香ばしく、脂の乗りも良い。

やはり秋刀魚は目黒に限る。

四日目

暗夜である。

方々で儕輩の呼び掛ける声が響くが、月は分厚い雲の向こうに居留守を決め込んだ儘である。吾輩も暗黒の中天に喉を鳴らそうと見上げたが、すぐ近くに儕輩の気配を感じて取り止めた。

果たして女が現れる。

すらりと伸びた四肢はやや細く、月の様に蒼褪めた顔は暗闇でも美しく映えた。立ち姿を見ると、異国の者とも思える。

警戒する吾輩に一瞥を残し、女は悠然と通り過ぎて行く。

其の背中を見送り、髭の先まで緊張していた吾輩の無様に気が付いた。

途端に、意識していたのは吾輩だけであった……という、何とも言えぬ恥ずかしさが込み上げる。

あの余裕な態度、どうにも女は苦手である。

だが、好きである。

闇夜に忍ぶが丁度良い心持ちだったのだが、この場には悪趣味な奴が居る。

居留守を決め込んでいた月が、恥じ入る吾輩を覗きに顔を出した。

何とも明け透けで厭味な奴だ。

睨み返す吾輩。

涼しい顔で応じる月。

どうやら、此処でもまた吾輩の一人相撲の様である。

あの余裕な態度、どうにも月は苦手である。

だが、好きである。

遠くの儕輩の声に応える様に、吾輩も月を見上げて歌い始めた。

衝動的に伸ばした前足が空を切る。

触れられない。

しかし、きっともうすぐ届くだろう。

五日目

この小路には視線がある。

程よく薄暗いが、決して寒くはない。

ある程度舗装されてはいるが、決して硬くもない。

瞳と肌と足の裏に優しいこの道は、吾輩のお気に入りである。

が、この頃は聊か足が遠退いている。

少し前の事である。

小路の中程にある小さな商店に、どうにも苦手な奴が姿を現したのだ。

体はさほど大きくはないが、不自然なまでに愛想が良く、絶えずニヤニヤとした表情を振り撒いている。

ニヤニヤと思うのは吾輩の嫌悪感に因る物であり、世間ではあれをニコニコと言うのかもしれない。

だが、あれは断じてニヤニヤである。

吾輩は其の筋の者ではないので、特に己の縄張りを主張しようとは思わない。

だからと言って、お気に入りを黙って諦めるつもりもないのである。

彼奴とは、一度きちんと話しをしなくてはならない。

相変わらず心地の良い小路を進むうち、件の商店が近付いて来た。

彼奴は今日も店先の床几に座り、相変わらずのにやけ顔を晒している。

姿勢を崩す事もなく、ひたすらニヤニヤし続けている。

挑発的に構えた前足と、表情に反して据わり切った眼差しが吾輩の胸に警鐘を鳴らす。

そう、吾輩はこの得体の知れない視線が苦手なのである。

思い切って声を掛けてみる。

しかし彼奴は応えない。

もう一度声を掛けてみる。

……今度も彼奴は応えない。

僅かに芽生えた苛立ちは、得体の知れない相手への恐れに因って生み出されたのだろう。

震える前足を伸ばし、軽く頭を小突いてみる。

と、彼奴はグラリと揺れて床几から転げ落ちると、甲高い鳴き声を残し、地べたで粉々に砕けてしまった。

思い掛けない反応に驚いたが、凡そ生物には出来ない反応でもある。
得体の知れぬ相手とっていたが、やはり妖者だったのかもしれない。
吾輩は、奇しくも妖しに憑かれた商家を守ったのである。

そんな事を考えていると、店の奥から店主が現れた。
吾輩は己の手柄を自慢する様な野暮はしないが、少しだけ誇らしげに店主を振り返った。

店の主が状況を確認する。
吾輩の姿を見付けた主人は、しかし憤怒の表情で吾輩を追い立て始めるではないか。
店主は、既に心まで妖者の虜に成っていたのだろうか……

少し間を置いて、店主の様子を見に戻った吾輩は愕然とした。
店先の床几の上には、粉々に砕けた筈の彼奴が鎮座している。
吾輩は総身の毛が逆立つのを感じた。
しかも、今度は「招福」と刻まれた小判を抱えている。

其れを見詰める満足そうな店主が吾輩に気付く。
妖しの傀儡と成った店の主人は、吾輩を敵と見なしたのだろう。
怒気を孕んだ強い警戒の視線で睨み付けてくる。

店主を救う方法が見付からず、吾輩は悄悄と其の場を後にした。

この小路には視線がある。
ひとつは彼奴。
そしてもうひとつは、救えなかった店主の視線である。

この小路には視線がある。
吾輩は、もうこの小路には近付けまい。

六日目

もうすぐ時間である。

西日の当たる中に小さな平屋が建っている。

周囲を囲う高さ五尺少々の垣根の足元には小さな隙があり、吾輩や儕輩達が通り抜けるのに丁度良い。

其れを潜れば、建物の小ささの割りにそこそこの広さを持った庭が姿を現す。

もうすぐ時間である。

南よりはやや西向きに此の家の縁側が在る。

夕陽に照らし出される其の温もりは、今のところ吾輩の優先席である。

とは言え、吾輩の器量はそんなに狭くない。

ふらりと立ち寄る儕輩も、気にせず受け入れる事にしている。

其れが此の縁側の持ち主の望みでもあるからだ。

此の縁側には、かつて吾輩と並んで座る者があった。

白い毛並みを持った二足歩行の雌で、他の二足歩行達よりも皮膚の皺が深いように見えた。

目尻は垂れ下がり、其れが優しげな印象を強く演出していたが、物腰の柔らかさは其の顔立ちよりも態度に明確に現れていた。

黄昏の日向の中にぼんやりと腰を下ろす彼女と、吾輩は何も語らずに時を過ごしたものだ。

もっとも、語り合おうとした所で互いの言葉は分からないのだが、そうした我等の時の中には、言葉に変わる確かな何かがあったのだろう。

いつの頃からか、彼女は吾輩にミルクを振る舞うようになる。

別に其れを求めたつもりはないのだが、湯気の立つ陶器から緑色の液体を啜る彼女が、吾輩にも一杯付き合えと言っているような気がして、吾輩は黙って其れを受け入れた。

平穏と静寂、そして仄温かく緩やかな空気は、喧噪や争い事を完全に排除した至福の時を生み出し、永遠とも思える優しさには終わりなど無いようにさえ思えた。

それから暫く経った或る日の事。

吾輩がいつものように西日の中を潜り抜けると、彼女は縁側の向こうにある部屋の中で横になっていた。

土色に染まる顔には、以前よりも深い皺が刻まれたようにも見える。

吾輩が小さく声を掛けると、彼女の双眸がゆっくりと動き出す。

其の瞳に映る吾輩の姿を確認した時、吾輩は彼女と並んで座る事はもう出来ないのだと悟った。

もうすぐ時間である。

うら寂しい夕暮れ時。

二足歩行の生き物達は何やら慌ただしく動き始める中、吾輩は沈み行く夕日を眺める特等席に今日も小さく蹲る。

隣に座る者もない。

ミルクも出てくる事はない。

ただただ、もうすぐ時間なのである。

七日目

其処は柔らかい暗闇である。

体に申し掛かる重みは極めて軽い。

ふわりとした感触が毛の先を撫でるのだが、頭を巡らせれば容易く吾輩に行く手を空ける。

二畳に満たない程度の其れは、駱駝色の毛並みが色褪せた長方形の布である。

其の暖かな毛並みに包まれた暗闇で、吾輩は昨夜の事を思い出す。

宵闇に紛れた吾輩を目聡く見付けたのは、小さな二足歩行の生き物である。

恐らく親であろう二足歩行の雌に前足を引かれ、短い後足で懸命に歩みを進めていた其れは、不意に動きを停止した。

訝しむ親の問い掛けに、小さき者の返答は吾輩に指先を向ける事で済まされた。

ぼんやりと眺めていただけの吾輩は、急に両者の注目する対象となり、思わず体を身構える。が、相手に害意が無い事はすぐに分かった。

頬の筋肉を吊り上げ、口角を高くすると同時に目尻を丸く下げる。

此の生き物特有の「笑う」という動作を確認し、吾輩は警戒を緩めた。

尤も、此の動作を騙し討ちに利用する狡猾な輩が居る事も吾輩は熟知しているので、警戒を解いたのは他の要因も含めた経験からの判断である。

其の時吾輩は、小さな茂みの中に居た。

暮れ時から降り出した雨を遣り過ごそうと、束の間、緑の軒先を拝借していたのである。

しかし、雨はいよいよ篠突く勢いとなり、吾輩を其の場に縛り付けたのだ。

暫時をそうして過ごすうち、吾輩は体温の低下に気が付いた。

此の場にじっと居座っていても、凍える前途を約束されてしまう。

そんな折である。

吾輩は、此の小さな生き物が示した吾輩への興味に身を預けてみようと考えた。

不快な思いもするだろうが、現状を大きく切り替える事は出来る。

何より吾輩は、此の二足歩行の生き物達が雨風を凌ぐ術を持っている事も知っているのだ。

其処は柔らかい暗闇である。

体に申し掛かる重みは極めて軽い。

ふわりとした感触が毛の先を撫でるのだが、頭を巡らせれば容易く吾輩に行く手を空ける。
二畳に満たない駱駝色の布から頭を出すと、昨夜の雨が嘘の様に晴れやかな朝の光が出迎えた。

吾輩のすぐ傍で、小さき二足歩行の生き物が寝息を立てている。
開け放たれた障子の向こうでは、二足歩行の親が様々な形の布を竹の棒に吊している。

吾輩は静かに表へ出ると、親の足元で小さく一宿の礼を言う。
彼女は吾輩に気が付くと、少し慌てた様子で夢の苑に遊ぶ我が子を起こそうとする。
其れを制止する様にもう一度大きく礼を述べると、吾輩は早々に其の場を立ち去った。

もう少し寝かしてやると良い。

路上の大きな水溜まりを軽やかに飛び越え、吾輩は今日の晴天を喜ぶのである。

八日目

一本足の異形が踊る野を、吾輩はふらふらと彷徨っていた。

寒空に浮かぶお天道様は、其の存在を誇示する許りで温もりという恩恵を出し洩る。

故に雲一つ無い快晴の空は、今や寒風の天下である。

もっとも其れは文字通り天の下という事であるから、天の上なるお天道様が僅かに情熱を注いでくれば、忽ち土筆も目を覚ますだろう。

が、夏の暴君は冬にもまた暴君なのである。

吾輩は寢床を抜けると、近くの野原へ足を向けた。

野原と言っても其れ程に広くはない。

二足歩行の生き物達が暮らす建物に囲まれた小さな大地である。

猫の額ほどの其の大地には、鎖で吊されキィキィと哭く板や雨樋のお化け、上っていた筈なのに下り坂に成る不思議な渡り板など、奇妙な物が居並んでいる。

中でも極めて不審な物は、廿もの儕輩達が同時に使用出来るほど巨大な憚りである。

二足歩行の生き物達は、一体何の目的で此を築き上げたのだろうか……

とまれ草も疎らな此の大地を相変わらず野原と呼んでいるのは吾輩だけかもしれないが、吾輩には他に良い表現が見付からない。

見付からないのなら、此処はいつまでも野原なのである。

野原では小さな二足歩行の生き物達が戯れていた。

何やら賑やかに騒ぎ立てながら、四尺五尺程度の縄を頻りに振り下ろしている。

彼等の足元では一本足の異形の者が数体、くるくると集団で円舞を披露していた。

どうやら、縄は其の異形を叩く為に振り下ろされ、異形の者は其の度に回転を加速させるのだ。

其の回転に酔ったのか、或いは虐げられる彼等に不快感を覚えた為か、吾輩は何やら気持ちが悪くなった。

一本足の異形が踊る野を、吾輩はふらふらと彷徨う。

不意に円舞から弾き出された異形の者が一体、吾輩の眼前に転び出た。

回転からも、縄に因る殴打からも解放された筈の其の異形は、しかし何やら恨めしそうに転がっている。

踊らされる事を望む以上、其れは自ら踊る事と同じなのだな……

ふらつく頭で、吾輩はぼんやりそんな事を考えた。

九日目

丸めた背中が更に丸くなる様な凍て付く朝。

身震い一つを置き去りに、吾輩は肩を丸めて歩き出す。

野を行けば、足元から聞こえるサクサクという軽快な音。

実に心地良く楽しい調子を奏でている。

纏わり付く冷氣さえ無ければ、吾輩はこの霜柱という楽士をもっと高く評価するであろう。

前足が凍え、後足が悴む。

如何に雅な吾輩とて、これ以上は辛抱堪らん。

吾輩は、矢庭に近くの土塀の上へと避難した。

少し見晴らしの良くなった世界を吸い込むと、鼻の頭がカサカサと乾きを告げた。

応じて見上げる空には静かに墨が溶かれ、やがてゆっくりと曇天が描き出されていく。

髭の先が小さく震え、硬骨な冬の足音を捉える。

恐らく今夜は雪だろう。

そして翌朝には、眩しい白光が目を射貫く程に積もるだろう。

そう……

彼奴が現れるのは、何時も決まってそんな朝である

丸々と太った体に、丸々とした頭を載せて佇む無口な彼奴。

吾輩は明朝の再会を楽しみに思った。

同時にそんな吾輩を、少しくすぐったくも感じた。

土塀を歩き出す吾輩。

何時しか寒さは気に成らなくなっていた。

十日目

睫毛の上をヒソヒソと動く物がある。

穏やかな日溜りに微睡む吾輩を無粋にも目覚めへと誘う其れは、此の穏やかさの生みの親たる陽光である。

サラサラとした柔らかな日差しが睫毛に揺れ、目蓋の戸口でサワサワと遊ぶ。

お天道様の御声掛けとあっては仕方が無い。

吾輩は不承不承起き上がった。

しかし両眼は岩戸より抜け出たばかりである。

天照大神に拝謁するとて、其の眩しさに堪えられまい。

吾輩は目蓋を細め、一つ大きく欠伸をした。

其れに続けと小さな欠伸が追い掛ける。

はて……

吾輩は天涯孤独の身であるから、恐らく其れは錯覚である。

どうやら寝惚けているようだ気恥ずかしくなり、吾輩は耳の後ろを掻いた。

果たして背後で体を掻く音がする。

はてはて……

怪談の季節には聊か早い。

恐る恐る振り返ると、小さな儕輩が吾輩を仰ぎ見ている。

何時の間に潜り込んだ物か、昨夜は確かに居なかった筈である。

困惑する吾輩を見て、小さな儕輩も難しい顔をする。

吾輩が右を向けば小さき者も右を向き、次は何だと吾輩に視線を戻す。

どうした物かと溜息を吐く。

小さな溜息が其れに倣う。

呆れとも諦めとも言える心持ちで寢床を出ると、案の定付いて来る。

此の者は何者か。

どうして吾輩に付いて来るのか。

疑問は何ら解消されないが、とまれ思案は面倒である。

吾輩は背後の足音が迷わぬ様に、僅かに歩調を緩めて進む。

春の歩みと同じ速度で。

十一日目

薄紅色の小さな花が細かく無数に咲き誇る春暖の今日である。
吾輩は小さな儕輩を伴い、長閑と雅を平らげに野原へと繰り出した。
鼻先に漂う空気は朗らかに緩み、自然と足取りが軽やかに成る。
小さな同行者も、吾輩に釣られる様に弾んで歩く。

何とも清々しく楽しい一時であったのだが、吾輩達は辿り着いた野原で、陽光に細めた瞳を今一度大きく見開く事と成った。

何時の間にそう成ったのだろうか。

大地は一面真っ青に染まり、二足歩行の生き物達が、其の青い地面の上に点在して居る。
或いは体を横たえて、或いは何層にも綴られた紙の束に目を落とし、或いは硝子板の付いた奇妙な絡繰りをガチャガチャと弄くり乍ら過ごして居る。

余りの異様な光景に吾輩と儕輩は其の場から距離を取り、暫く彼等を観察してみる事にした。

お天道様が中点に差し掛かる少し前、二足歩行の生き物が数を増やし始めた。
あちこちに集団が形成され、其れ其れに酒肴を交えて歓談している様である。
増え始めると早い物で、気が付くとあの異様な青色の大地は彼等の姿に隠されて見えなく成ってしまった。

不思議な物で、見えなく成ってしまえば其れ程警戒する事も無い様に思えてくる。

吾輩はふらふらと二足歩行の生き物達に近付いて行った。

小さき儕輩もちよこちょこと吾輩に続く。

吾輩は品格という物を大層重んじている。

くれぐれも断っておくが、決して彼等の手元の肴目当ての行動では無い。

断じて無い……

が、吾輩の後ろの小さな共連れが行きたがるので、仕方無く付き合ったのである。

彼等から味の濃い食べ物を頂戴しつつ、吾輩達は頭上の薄紅色を振り仰いだ。

吾輩も、儕輩も、そして二足歩行の生き物達も、皆此の花の下に寄り集まる。

風雅を分かち合う事が出来るのなら、或いは我々と彼等は近しい存在なのかも知れないと考え、吾輩は彼等二足歩行の面々に視線を戻した。

そして即座に其の考えを打ち消すのである。

何とも騒がしい事此の上無い。

要するに花は契機である。

彼等は寧ろ、此の大騒ぎを楽しみに寄り集うのだろう。

酔い騒ぐ彼等の表情も、実に見事な花盛りである。

だがしかし、吾輩の感性には賑やか過ぎる。

世の中の楽しみ方は其れ其れである。

吾輩は彼等を否定しない代わりに、黙って其の場を後にした。

遠退いた喧噪を振り返る。

薄紅の花の下、薄紅に上気した二足歩行達が踊っている。

薄紅色の小さな花が細かく無数に咲き誇る、春暖の今日なのである。

十二日目

何かが尻尾を引っ張って居る。

断続的に、且つ力の強さも様々に何度も尻尾を引っ張って居る。

しかし吾輩はまだ微睡みの中である。此の無粋な何者かを振り払う様に、吾輩は大きく尻尾を動かした。

何かが尾の先に触れた様だが、其れっ切り尻尾を引っ張る何者かは居なくなった様である。

平穩を取り戻した吾輩が再び深い眠りに身を委ねようとした時、今度は髭を引っ張る者が現れた。

此の髭は吾輩の自慢である。

常から容易く触れるを許しはしない。剰え引っ張る等とは暴挙も甚だしい。

吾輩は跳ね起き、着地と同時に身構えた。

全身の毛を逆立てる様にして睨め付けると、其処には驚いた顔をした小さき儕輩が佇んで居る。

吾輩の誇りに無遠慮な足跡を残そうとした何者かは、しかし無邪気と言う最強の楯を携え、静かに吾輩に近付いて来る。

吾輩の陥落は、火を見るより明らかであった。

此の小さき征服者が何故に吾輩の眠りを侵略したのか、其の目的は直ぐに判明した。

服従を余儀なくされた吾輩の溜息に合わせる様に、征服者が天空を指し示したからだ。

促される様に従い、天を見上げる吾輩は、其処に侵略の理由を見付ける。

.....アレを取ってくれと言うのか.....

然し其れは不毛な事。

吾輩も過去、何度となく挑んでは其の度に苦汁を飲まされて来た。

また、首尾良く取れたとして、其れが期待を裏切る物である事も今の吾輩は知ってしまっている。

丁度一年前の事である。

吾輩は何とかアレを地上に引き摺り下ろす事に成功した。

だが、地上に降りた其れは、天に在る時の様な雄大さを失くし、薄く平たく、ただ力無く横たわるだけであった。

アレはそう言う物である。

仕留めた所で、腹を膨らます事も出来ないのだ。

吾輩は、此の小さな征服者がどう説明すれば納得するだろうかと思いを巡らし始めた。

五色の波濤の下、数匹の巨大魚が風を受けて泳ぐ其の足元で。

十三日目

ゆっくりである。

雨音の心地良さに身を委ねた儘、吾輩は気怠く頭を廻らせた。

寝床の外では、淡い青色や紫色の萼を持った小さな花が寄り集まって咲いて居る。

雨の中で静かに色付く姿は何とも奥床しい。

とは言え、濡れるのは苦手である。

雨の吹き込まないギリギリの所で其れを眺めて居ると、いつの間にか小さき儕輩が隣に腰を下ろした。

まだ幾許も生きて居ない此の儕輩も、美しさを解する心を持つのだな……

そう思ったのも束の間、小さき儕輩の眼が獲物を狙う其れへと変化する。

何事かと思い視線を追い掛けてみると、其の先は花ではなく葉の方に行き着いた。

一体何を見て居るのだろうと目を凝らす内、吾輩もまた、儕輩と同じ目付きに変化してしまう。

仕留めたい。

其れには外へ出なければならない。

だが、矢張り濡れるのは苦手である。

吾輩達は同じ物を見詰めた儘、湧き上がる狩猟本能に呼吸を荒くする許りである。

そんな吾輩達に気も留めず、獲物は悠然と葉の上を歩く。

ゆっくりである。

実にゆっくりなのである。

然し確かに進み行く其れは、雨に弾かれる葉っぱの上でも自分の道を失わない。

望みと苦手の狭間で葛藤する吾輩の小ささを笑われた様な気がして、吾輩は少し悔しくなった。

どうにも心が乱れて居る。

変わらぬ旋律を奏でる雨音も、今では雑音に感じてしまう程である。

憂鬱な雨を覚えた吾輩は、同時に隣の小さき者と吾輩の間にも大した差が無いと言う事を学んだ。

ゆっくりである。

実にゆっくりなのである。

吾輩達の進化も、実にゆっくりなのである。

十四日目

また、彼奴が呼んでいる。

御天道様が自己主張を始める頃、彼奴は気紛れに吾輩を呼ぶのである。

其れまで一体何処で何をしていたのか、彼奴は突然帰って来ては、当然の様に吾輩を呼び寄せるのだ。

湿気と熱気を引き連れ、軽い足取りで夏が顔を出す。

其れとは対照的な重い足取りで、二足歩行の生き物達から覇気が薄れていく。

彼等は皆一様に、顔中から不自然に水を滴らせて歩いている。

吾輩達が春と秋に生え替わりを行う様に、あれが二足歩行達の夏に於ける習性なのかもしれない。

また、彼奴が呼んでいる。

そう言えば、彼奴が帰って来るのは何時もこの時期の様な気がする。

二足歩行の生き物を奇妙に思っている時、決まって彼奴の声が掛かる。

そうか、彼奴は夏に帰って来るのだな……

吾輩が小さな結論を導き出した時、其れを待っていたかの様に彼奴の声が聞こえてきた。

早速の御呼び出しである。

応じて吾輩は、いそいそと歩み出した。

向うの角を左へ折れて、突き当たりの垣根を潜ると二足歩行の生き物の住み処が有る。

彼奴は其処で吾輩を待っているのだ。

吾輩を呼ぶ声が繰り返される。

否が応でも駆け足になる。

急ぐ余りに、垣根の潜り方が乱暴になる。

頭に張り付いた木の葉を振りながら、吾輩は彼奴の側へと近付いた。

其処には先客がいた。

吾輩を見付けると先客……小さな儕輩は、自らを誘ったであろう声の主と吾輩とを交互に眺めた。

その通り。

吾輩と彼奴とは旧知の仲である。

吾輩がそう答えようとした時、少し強めの風が吹いた。

吾輩達の頭上で、彼奴が楽しそうに歌い出す。

ちりんちりんと心地良い歌声である。

この夏が遊び疲れて帰るまで、彼奴は此処で歌い続ける。

風に乗せて涼しげな美声を披露する彼奴は、いつでも楽しそうである。

きっと彼奴は、己の在り方を深く理解しているのだろう。

どれ程の者達が其れを成し得るのか。

彼奴はどの様にして其れを悟ったのだろうか。

あれこれと考える吾輩の耳に、再び彼奴の声が届く。

ふむ、その通りである……

吾輩は考えるのを止め、この美しい歌声に身を預けた。

隣では一足先に、小さな儕輩がそうしている。

時として、経験や知識が感性の邪魔をする事もあるのだな……

またしても思考の中に身を落とそうとする吾輩を置いて、小さき儕輩は実に気持ち良さそうである。

其の姿に自らを顧みて、彼奴が毎年吾輩を呼び付ける其の理由が、何となく分かった様な気がした。

十五日目

宵闇の幕はとても古い物である。

だが、其の古さ故に美しさを施しもする。

薄くなった生地は昼を覆い切れず、織り目の隙間に星という光源を紡ぎ出すのだ。

吾輩は退廃的な懐古趣味を好んではない。

しかし時には古い物も良い物である。

この夜空の盛宴は、真新しい暗幕では生み出せないのだ。

ふと、腹の底に低音が響く。

ビリビリと細かな振動が身体を抜けて、髭の先まで震わせる。

隣で困惑する小さな儕輩に、吾輩は静かに首を振った。

そうではない。

夕餉は頂いたばかりである。

所へ再び低音が響く。

小さき者が、不思議そうに己の腹を覗き込む。

ここからは見えんな……

吾輩は小さな儕輩を促すと、星光の中を歩き出した。

疑問の拭えぬ細かな足取りが、テコテコと吾輩の後を追う。

やがて森に入ると、途端に闇色が強くなる。

背後で小さく光る二つの星が逸れぬ様、吾輩は少し歩調を緩めた。

再三低音が響く。

しかし今度の其れは、低音と言うよりは轟音であった。

これは流石に、腹の虫とは思うまい。

不思議を通り越してしまったのか、背後の気配に僅かな怯えが伺える。

折角出向いてきたのだ、ここで足が竦んでしまっては台無しである。

吾輩は少々強引に先を急いだ。

小さな足音が慌てて其れに続く。

そうして程なく森を抜けると、あの轟音が盛大に吾輩達を出迎えた。

萎縮する小さき者の緊張を解き、瞳を夜空へ向けさせる。

古き宵闇の垂れ幕が星空を演じている。
其れを見上げる小さな二つの星がある。
そして両者の間には、轟音と共に大輪の花が咲き開く。
色取り取りの炎の花は、其の瞬間の命を大音声に叫んでは消えていく。
だが、其れは如何にも美しい。

花々が空気を震わせ、刹那の命を競い合う。
腹の虫の声ではないし、例え空腹で訪れたとて其れを満たしてくれる訳でもない。
しかし見上げる吾輩と小さな儕輩は、確かに何かを満たされているのだ。
そうであるなら、あの大輪の花の声は、やはり吾輩達にとって何かの虫の声なのだろう。

十六日目

灼熱を誇った御天道様も、何時しかすっかり柔和と成った。
移ろう最中は気付かなくとも、落差に触れれば振り返るといふもの。
時節に呼ばれて肥えるのは、何も馬ばかりではないのである。

聊か重みを増した身体を省みる。
過剰な蓄えは、何れ必ず持て余すのだ。
吾輩は目方を捨てに、暮夜の散歩へ乗り出した。

暫く歩くと広大な畑へと行き着いた。
朧な月が控えめに明りを零す中、吾輩の優雅な足取りが畝に刻まれていく。

と、何者かが吾輩の前肢を掴んだ。
余りの驚きから、後足が反射的に跳躍運動を取るも前肢は掴まれた儘である。
着地までの僅かな間に、吾輩は決戦を覚悟した。
先手必勝と言うが、後の先を取る事もまた理である。
吾輩は足先が地へと触れる刹那を見極め、即座にガブリと切り返す。

途端に口中に広がる青臭さ。
次いで甘さを内包した苦い風味が舌へと上る。

ふむ……
これは南瓜である。
其の蔓である。

周章を恥じ入る吾輩の目に、畑の向うで揺れる角灯の明りが映った。
南瓜を奇妙に割り抜いた其れは、少し二足歩行の生き物にも似ている。
其の目鼻からチラチラと零れる灯火が吾輩を引き込み、ぼんやりとした不安を植え付けた。
見入る程に深く忍び込み、不安は仄かな恐怖を突く。

所へ背後から声が掛かる。
肝を縮めていた吾輩は瞬時に飛び退り、威嚇の姿勢で迎え撃つ。
しかし対峙する声の主は、敵意の一つも持たない小さな儕輩であった。

まんまと悪戯に乗せられた様な決まりの悪さである。
吾輩は取り繕う様に毛並みを調べ、小さき者を促して帰路につく。

やがてこの小さな儕輩も成長を遂げる。

今は幼さ故に分からなくとも、何時か吾輩の威嚇の理由に気付くだろう。

其れは遣り切れぬ。

別の何かで塗り替え、忘れさせてしまおう。

この悪戯には対価が必要だ。

道すがら、何やら美味しい物でも馳走せねば成るまい。

十七日目

近頃は御天道様も朝寝坊である。

吾輩が目を覚ました時、辺りはまだまだ薄暗く、丸めた背中を伸ばすには温もりという恩恵が足りない様に思われた。

いずれ吾輩に急ぐ様な用向きは無い。

日が高くなるまで、今一度夢見の園にて戯れよう。

そう思う吾輩を呼び止める様に、寒風が懐深くに躍り込んだ。

否、そんな筈は無い。

昨夜は小さな儕輩が、吾輩の寝床へ潜り込んで居た筈である。

吾輩の寝床は吾輩の専用である。

つまり吾輩にとってのみ快適であれば良いのである。

転じて言うなら、其れ程に広くは設えていないのだ。

ただ断っておくが、決して狭い訳ではない。

無闇に豪華であるよりも洗練された質素を好むという、謂わば吾輩の高尚な嗜好に因る物である。

そうした吾輩の寝床に、小さき者は無遠慮にも上がり込むと早々に寢息を立て始めた。

吾輩は仕方無しに、此の小さな儕輩を抱く様にして眠りに着いた筈であった。

所が目覚めの今、寝床には吾輩だけである。

冷たい風は、吾輩に此の事態を告げる為に吹き込んで来たのであろう。

そうであるなら目覚めなければなるまい。

吾輩は寝床を抜けると、早暁の中へ歩み出た。

近くの餌場から順繰りに、何時も通りの道行きを廻ってみる。

しかし何分にも時間が早い。其れが為、何処も閑散として何者の気配も感じられない。

小一時間程近所を歩いてみたものの、小さき者は見付からなかった。

小さき者には小さき者の事情もあろう。

吾輩はそう思い直し、自分の寝床へ帰る事にした。

そもそも、吾輩が捜し歩く道理など無い様にも思える。

其れが正しい筈なのだが、しかし今一つ釈然としない。

吾輩は常から理知的な気品を備え、思慮深く物事を見極めてきた。
つまり、何やらモヤモヤと考えるのが面倒である事も知っているのである。
面倒な考えなら止めてしまおう。

寢床へと帰り着くと、小さな儕輩が寢息を立てている。
吾輩に丁度良い寢床は、小さき者には隙間が多いのだろう。
其の姿は酷く寒そうである。
吾輩は仕方無しに、此の小さな儕輩を抱く様にして眠りに着いた。
釈然としない温もりが、吾輩の懐に沁み込んだ。

十八日目

年老いた巨木が首輪を強いられている。
藁を左纏りにし、ギザギザに折られた白い飾りが付いた大きな首輪である。
其れは二足歩行の生き物からの愛玩、或いは彼等への隷属の証明。
巨木は彼等に養われているのである。

この大きな老木の脇には、時折ガラガラと鳴き声を上げる奇妙な建物があり、二足歩行達が金属を投げ付けては頻りに前足を合せている。
恐らく親子連れなのだろう。
子供が親に倣って前肢を合せた。
鮮やかな緋色の布で身を包み、其の上から更に薄紅の布を垂らした幼き者は、何やらとても誇らしげである。
しかし、前足を覆う布が地面との距離に対して長過ぎる様である。
其れを引き摺らぬ様、常に前足を胸の辺りへと持ち上げている姿は他種族ながら微笑ましい。
一足毎に頭の毛に差し込まれた飾りがチラチラと輝き、吾輩は何やらソワソワした。

一行が去るのを見送って、吾輩は改めて老いた巨木を仰ぎ見た。
物静かな老木は身じろぎもせず、枝葉のひとつも揺らさない。

所へ再びガラガラと鳴き声が聞こえる。
視線を移すと、小さな儕輩が建物と戯れている。

吾輩はゆっくりと歩き始めた。
其れに気付いた小さき者が走り寄る。
暫し並んで歩く内、吾輩は見慣れぬ風景に足を止めた。

うん……そうか……

吾輩は既に遠くなった老木を振り返る。
サワサワと柔らかな言葉を風に溶き、実に気持ち良さそうである。

小さな儕輩へ向き直る。
訝しむ瞳が、吾輩の其れと同じ高さに浮かんでいる。

此の次はあの巨木に話し掛けてみよう……

吾輩は密かに考えた。

十九日目

昨夜から泣き出した空は意固地なまでに不機嫌を貫き、宥めに入った寒風の背に雪華を負わせて追いつく。

愚図り続ける冬空は世を白銀へと染め進み、明けては地平を境界に、白と灰との睨み合いなのである。

吾輩は朝の訪れに気付かぬ振りをして、熱りを漏らさぬ様に丸く成った。

昼を少し過ぎた頃である。

流石に泣き疲れたのか、風雪の気配が遠退いた。

途端、朝餉を踏み倒した吾輩に腹の虫の激しい抗議が始まる。

虫よ、空腹は吾輩とて同じである。

そう責める物ではない。

ノソノソと動き出した吾輩を、陽光の照り返す銀世界が出迎えた。

眩しさに眼を細め、足元の冷たさに四肢を絞り上げる様に縮こまる。

此の様子では、狩り場は既に雪の下であろう。

吾輩は自力での調達を諦め、二足歩行の生き物の住処へ足を向けた。

垣根を潜ると、其処も一面真っ白であった。

早速縁台へ飛び上がり、愛らしく一鳴きする。

饑えた様な匂いが近くなり、程無く赤ら顔の二足歩行が顔を出す。

フラフラしている。

ニコニコしている。

一度引っ込むと丸めた紙片を持って戻り、中身を一つ一つ吾輩に見せ付けて来る。

やや光沢が有り、プルプルと頼りなく揺れる紅白の板切れ。

鱒の稚魚の様だが、何やら尋常ではない色をした物。

そして鯛。

こればかりは香りが明らかに物語っている。

見慣れぬ物も混じっているが、何れ食料には違いない。

虫が鳴く。

涎が溜まる。

いや、少し待て。

吾輩は唾を飲み込み、一鳴き礼を述べてから紙片を受け取り歩き出した。

雪に埋もれた狩り場を抜ける。

小さき儕輩が、吾輩の来訪に気が付いた。

二十日目

陽光が暖かな色彩で誘惑する昼下がり、吾輩は長閑な気持ちで寢床を抜けた。
遠くとも朗らかに笑う御天道様を振り仰ぎ、吾輩が挨拶を宣べる。
すると、其れを待って居たかの様に寒風が吹き付けた。
温々とした日射しを期待した吾輩は、どうやらまんまと騙された様である。
泰西の英傑を打ち負かした将軍は、中中に戦略家でも在る様だ。

寒さに強張る身体を慎重に動かし、吾輩は再び寢床で丸まろうと考えた。
所へ小さな儕輩が吾輩を連れ出しに来る。
髭を引かれる思いではあるが、吾輩は二度寝を諦め、此の小さき者の誘いに乗る事にした。

実に運動量の多い道程である。

野原の先で石壁へ跳び上がる。
だが其処を十歩と進まぬ内に、二足歩行の生き物が暮らす建物の上に飛び移った。
屋根伝いに行くのかと思えば、今度は建物脇の黒い綱を渡り始める。
綱はやがて石柱に行き着くと何方向かに分岐し、小さき者は右へと進路を取った。

後に続く吾輩は、小さな儕輩の後ろ姿を眺めた。
撓やかな背の上で、肩胛骨が規則正しく動いている。
後足は程良く発達し、すらりと伸びた尻尾が足取りの軽さに合わせて揺れている。
白い毛並みも誇らしく、小さな儕輩は勇んで前を歩み行く。

否、其れは正しくない。

今まで気付かなかった訳ではないのだろう。
と言って、気付かぬ振りをしていた訳でもない。
只、其れが然うである事と結び付かなかっただけなのだ。

何本目かの石柱を通り過ぎた後、前に行く白い毛並みが間近の木へと飛び移った。
枝を的確に選んで飛び降り、地表でぐるりと吾輩を見る。
吾輩は降りなかった。
石柱を繋ぐ綱の上で短く鳴くと、小さな儕輩も短く応える。

否、其れは正しくない。

小さな儕輩は小さかった儕輩であり、白い毛並みの儕輩なのだ。

曾て小さな儕輩だった瞳を二度三度瞬くと、白い儕輩はもう一度短く鳴いた。
吾輩は応えなかった。
其処は吾輩の場所ではない。
其処は御前の寢床である。
吾輩は顔を背けると、尻尾を小さく二度振ってから歩き出した。

はて……何うした事だろう……

何やら髭がムズムズする。

二十一日目

大軍勢である。

ほんの数日前までは気配さえ無かったと言うのに、何時の間に布陣した物か。

陣立ては不規則で、密集と閑散が入り乱れて居るのだが、矢張り其の数には圧倒される。

吾輩の馴染みの野原は、今や彼等の制圧下である。

とは言え、吾輩も麗らかな春色に髭を引かれて出て来たのである。

長閑けき昼寝を得る為には、此処で簡単に引き下がる訳には行かない。

旅寝の雅を守る為、吾輩は決意の一步を踏み出した。

.....しかし無反応である。

恐る恐る立哨の横を通り過ぎる。

死線を踏み越す吾輩。

其れでも彼等は黙した儘である。

吾輩も諍いを望んで居る訳ではない。

故に此は良い事なのだが、何等かの策謀ではないかという疑念が生じる。

争わぬ安心と、裏を怪しむ不安。

目的に近づく昂揚と、不測を気にする焦燥。

其れ等が緬い交ぜと成り、吾輩は少し目眩がした。

ふらりと身体が揺れて、彼等の一人と肩が触れる。

吾輩の視界に、緑色の粒子が舞い上がる。

そうだった.....

吾輩はすっかり思い出した。

吾輩は彼等とも馴染みである。

早春に現れる彼等を、薄情な吾輩は何時も忘れてしまって居る。

其れを省みて済まない気持ちに成るのも、吾輩の春の風景なのだろう。

昼寝に心地良い日溜まりを見付ける。

きっと前の春と同じ日溜まりなのだと、覚えて居なくてもそう思う。

緩やかに身体を丸めると、彼の大軍勢が吾輩を取り囲む。

眠りへ沈む吾輩が冷たい風に晒されぬ様、彼等がポカポカとした陽気で守って呉れるのだ。

此処はもう春である。

微睡む吾輩に、土筆の衛士がそう告げた。

二十二日目

ジリジリと纏わり付く日射しを嫌い、吾輩は散歩の進路を森へと向けた。

木々が熱波を遮り、自然に足取りも軽く成る。

気持ちが涼しさを感じ、心が静けさを覚えていく。

獅噛み付く幹が増え、蝉達の叫声は益々盛んな筈である。

然し森は不思議な程に静謐であった。

森の奥には小さな池が在る。

小規模乍ら岩場を有し、程良く入り組んだ構造が心地好い湿り気を演出している。

元来、吾輩は濡れる事を好まない。

当然ジメジメも好きではないのだが、湿り気は嫌いではないのだ。

岩場へ入り込む吾輩。

しっとりしている。

程々にひんやりしている。

吾輩は無警戒に腹這いの姿勢を晒すと、臍を擦る様な冷感に身を預けた。

蝉の声が遠離り、髭が幽かに重く成る。

池で何かが撥ねる音がした。

今宵は鮒を頂こう……

二十三日目

総身で見事に毛が弥立つ。

風の便りを開いてみれば、北の響りが花開く。

否が応でも背が丸くなる。

総身で見事に毛が弥立つ。

其れは吾輩の意志とは無関係に、本能が働いた結果である。

吾輩ですら然うなのだ。

体毛の少ない二足歩行の生き物達は、さぞや難渋しているに違いない。

どれ……

震える我身の慰めに、凍える二足歩行達を眺めて優越感に浸るとしよう。

少々意地の悪い企みは、然し何処かで楽しさを生む。

吾輩は、何やら足取りが軽くなるのを感じた。

往来へ出てみると、険しい顔付きの二足歩行達が肩を怒らせ、急ぎ足で行き交っている。

吾輩は此れ見よがしに毛並みを自慢する。

然し、彼等はまるで興味を示さない。

きっと余裕が無いのだな……

そう思い、吾輩は首を巡らした。

と、番で歩く二足歩行の雌雄が目に入った。

肩は怒っているものの、其の表情は穏やかである。

ぴたりと身を添わせ、番の間には風さえ侵入を許されない。

其の時である。

吾輩の総身で、再び見事に毛が弥立った。

二十四日目

ドサリと音がした。

重たい音を聞かせた其れは、一方で脆く儂い。
冷気を湛えた白色は、然し自らも其の冷氣の下に凍えるのだろう。
積り、寄り添う事で暖かさを求めたに違いないのだ。

やがて、夜を掛け強固に結んだ彼等を、朝の日射しが無遠慮に解していく。
静かに惜別の涙を流し、彼等は次第に手を離す。

ドサリと音がした。

吾輩が寢床を抜けると、近くの木の枝が大きく撥ねた。
そしてまた、ドサリと音がする。

重たくて軽い音。
儂くて虚しい音。
唐突で静かな音。

白銀は吾輩の感性に優しく語り掛ける。
故に好きである。
だが、如何せん冷たくて触り難い。
もどかしい心持ちである。
とは言え、其れが何処かで恍惚と結び付くのだから、吾輩も未だ未だ若いと言えよう。

ドサリと音がした。

また木の枝が踊っている。
其の先の空では、彩色された角餅も踊っている。
角餅は細糸を垂らし、小さな二足歩行達が地上で其れを握り締める。
あんなに高い所でゆらゆら踊っているのだから、角餅からも沢山のドサリがあるに違いない。

小さな欠伸を置き去りに、吾輩は緩やかに歩き出した。
道道には、松と竹を組み合わせた飾り物が並ぶ。

背後でドサリと音がする。

吾輩は、何やら少し愉快になった。

二十五日目

髭が唸った。

低く喉を鳴らす吾輩の声とは、明らかに趣を違える響きである。

緊張した様にピンと伸びている癖に、高音を歌いそうな其の有様とは裏腹に、髭の震えからは低い音しか出て来ない。

纏わり付く湿気の所為であろう。

吾輩が空を仰ぐと、案の定、奴が居る。

白い身体を不自然に膨らまして、見る見る形を変えて行く。

奴はまるでジッとしていないのに、何故だか不動の者の存在感を強く放って来る。

きっと出来るに違いない。

一度は挑んでみようと思うのだが、今日の所は見送ろう。

空の腹が鳴る。

奴が灰色に濁る。

さて吾輩は、軒先を探すとしよう。

二十六日目

新種の手掛かりである。

緊張からの特使が、吾輩の尻尾の先までゆっくりと検分して歩く。

思わず喉が鳴る。

此れは新種に相違無い。

吾輩の知る限り、こんな色彩の蛙は存在しない筈である。

況して暑気の潮も引いて久しい時節、今更ゲコゲコでもあるまい。

然し、此の形……

此れは矢張り、新種の蛙に相違無い。

見るも鮮やかな赤である。

そして恐らく、何者かに襲われたのであろう。

でなければ、脚先を捨てて行くなど考えられぬ。

新たな存在を追い掛けた探求心と、傷付いた者への憐れみとが、吾輩の中で交錯する。

だが、何れにしても見つけ出さなければ助ける事も出来まい。

此れは断じて言い訳では無いのだ。

然う思いつつ視線を上げた時、吾輩の瞳は其れを捉えた。

鮮やかな赤の大群。

山肌は、すっかり蛙の色で染められている。

形容し難い美しさである。

然し同時に、彼程の数の蛙が集まっているという異様。

吾輩の背筋に紫電が走る。

いや、違うぞ蛙達。

此れなる御前達の同胞の脚は、吾輩がもいだ訳では無いのだ。

山風に合わせる様に、深紅の蛙達がサワサワと歌い出す。

触らぬ神に祟り無し。

神は遠くから眺める位が宜しかろう。

吾輩は新種の探索を諦め、遠くから此の美しい景色を楽しむ事にした。

二十七日目

何者かが来訪を告げる。
此れは然う言う音である。

尤も、吾輩に対する物では無い。
無いのだが、聞こえてしまうと矢張り気に成る。
一粒の必然さえも持たぬのに、酷く落ち着かない心持ちである。

行く可きか。
行かぬ可きか。

迷う傍から脚が出る。
悩む序でに大義を紡ぐ。
戒む間に粗忽を溢す。
心と体は、時に互いの存在を忘れてしまう。
詰まり今、慎みを欠いた此の行動は、吾輩の所為では無いのだ。

来訪者の音は、半丁程先から聞こえて来る。
誰に見せるでも無いのに、ソワソワを隠して平静を装いつつ歩く。
たった半丁が百里にも感じられる。

然うで有るなら、此れは長旅に成ろう。
長旅に成るのなら、行厨が必要である。
先ずは手頃な食材から調達為ねば成るまい。

矢張り鮒か。
いやいや、此処は少し大きく、鱒ではどうだ。
いやいや待て待て。
凍える覚悟で水中に挑むのだから、其れ相応の成果を上げねば遣り切れぬ。
鯉か。
鯉を狙う可きなのか。
然し、鯉など仕留めた所で、吾輩一人で食べ切れるのだろうか。
では儕輩を集めて……
其れなら寧ろ、始めから儕輩と連れ立って獲物を追えば良いではないか。

はて……

抑、吾輩は何故に鯉を仕留めようと為て居たのだろう……

二十八日目

幾分温まったとは言え、未だ未だ薄ら寒い朝である。

吾輩としては、もう暫く丸まって居たいのだが、どうやら然うも行かぬらしい。

彼は目白である。

頻りに長兵衛なる名を呼び続けて居るのだから、最早目白に間違い無い。

然うで有るなら、目白の向かう先で彼奴が待って居る筈だ。

吾輩は鼻を鳴らすと、背伸びもソコソコに目白を追い始めた。

道々、深く成る香気。

居る……

彼奴は間違いなく待って居る。

雷を警戒せずに会える機会は多く無い。

少し急がなければなるまい。

吾輩の歩調が上がった矢先、向こうの枝で目白が羽を休めた。

近寄り乍ら視線を下せば、彼奴が静かに立って居る。

傍らには、笈を担いだ供も居る。

少々待たせてしまったか……

いや、其れも亦風雅。

学び秀でし烏帽子と、吾輩は無言で挨拶を交した。

悲鳴である。

吾輩は寝惚けてなど居ない。
彼は間違い無く悲鳴である。

然し其れが何れに対して上げられた物であるのか、吾輩には皆目見当が付かない。
抑、悲鳴とは咄嗟の場合に発せられる音でしかない。
危機に瀕して居るのか、或いは歓喜に因って発せられたのかさえ、容易に結論付けられぬ。
両者の間には音調の差異が有る様にも感じられるが、実際には其れ程の差は生じ得ない。
身振りや表情を踏まえつつならば兎も角、遠くに音を拾っただけでは如何とも判断し難いのだ。
とは言え、前者の場合では難渋して居るに違いないのだから、聞こえてしまった以上、放って措く訳にも行くまい。

然うして悲鳴の聞こえた方角へと、吾輩が前脚を進めた時だった。

悲鳴である。
風の悲鳴である。

優しく、温かな性情である癖に、何と乱雑な照れ隠しよ。
虎落に響く風の悲鳴が、何時の間にもやら陽気を帯びて居る。

進め掛けた足を引き戻すと、吾輩は小さく欠伸を為た。

三十日目

丘の上が仄々として居る。

夜通し降り続けた雨は上がったが、天地の間には未だ其の名残が烟って居るのだろう。

消え行く前の薄惘とした粒達が東雲を気取り、丘の上が仄々として居る。

もう少し日が高く成ったら、彼処まで出掛けるとしよう。

数日前、白色の萼を開いた彼の子を確かに見たのだ。

今日辺りは、ほんのり紅みが差している頃に違いない。

白色の彼の子も捨て難いが、吾輩は矢張り、次第に深紅へと染まり行く様に時めきを見付けてしまうのだ。

然う言えば、丘へ向かう道々にも彼の子の同族が沢山佇んで居た筈である。

彼等も亦、美しい真藍や薄桃を誇り、時に其れ等の入り交じった複雑な色合いを演じて魅せて呉れるのだ。

幾重にも続く同色の濃淡が、聴てぐるりと別の色へと変貌したかと思えば、素知らぬ顔にて元の色へと帰る。

何とも興奮する。

午後の散歩が楽しみである。

吾輩の髭が震えたのは、朝露の重みの所為許りではない。

三十一日目

不毛である。

植物の話しではない。

轟しい短命の歌や、地に落ちて動かなくなった歌い手の事でもない。

彼等は寧ろ、凝縮された時の中に身を置いて居る。

だから其の七日間に縁を得られぬ儘、蟻の来訪を待つ許りの八日目に至ったとしても、彼等の形は歪まないのだ。

不毛……

其れは彼の女の事である。

程良い木陰の中で下草に包まれる様に仰向けと成り、無防備に腹を晒して居る。

何時かの月夜に見えた、異国の女に似て居る気がした。

息とも声とも付かぬ音を漏らし乍ら、何者に向けて媚びて居るのか。

吾輩が通り掛かった以外には、同胞は愚か、二足歩行の者さえ通らぬと言うのに。

況してや短命な歌い手達を相手にして居る訳でもあるまい。

全く不毛な事である。

思う内、女の視線と吾輩の視線がぶつかり合う。

不毛な女……

否、此れは……

……朴念仁と言う事が……

ふむ。

暫しの間、木陰で涼を取るのも宜しかろう。

吾輩も木陰に脚を向ける。

鼓動が少し早く感じられるのは、きっと暑さの所為だろう。

三十二日目

通り過ぎる者がある。

吾輩の左肩を掠め、体毛の先を櫛る様にして、通り過ぎるものがある。

無関心な程に言葉も交さず、留まりもしなければ、振り返りもしない。

然うであるなら、此の身に触れる事さえも遠慮すべき所ではないか。

其れなのに、瞳に映らぬ何者かは、少し許りの肌寒さを置き土産として、吾輩の横を擦り抜けようとするのだ。

見上げる空の高さが遠く感じられる。

見えぬ寒さを振り返る時、空は何時でもこんな顔をしている。

左肩を何かが通り過ぎようとする。

然し其れは、吾輩の左に寄り添う者の更に左へと抜け去って行く。

吾輩の左肩は、何やら優しい儘である。

温かな感触を不思議に思い、吾輩は左の者へと視線を向ける。

声に至らぬ小さな音が応えた。

然様ならば、吾輩が御前の右を温めよう……

並び歩く八つの足音が、冷えて行く時節に心地好く感じられた。

髭の向く儘

<http://p.booklog.jp/book/34110>

著者：深沢幸弘

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yukiyukisan/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/34110>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/34110>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.